

イネカラバエ薬剤防除に関する2,3の知見

田村市太郎・飯島 尚道・岸野 賢一

(農林省北陸農業試験場)

この重点的な要旨は「イネカラバエ2化期の薬剤撒布時期はいつか」という表題にして植物防疫第9巻第11号に掲載し、薬剤撒布による傷穂減少と増収効果の極めて高いことを示したが、薬剤による産卵忌避力は低く、深部食入幼虫には効果がないので、ねらいは幼

虫の侵入防止効果であるとし、そのためには成虫発生最盛期を基礎として産卵最盛期を想定し、産卵最盛期を撒布の終期としてその前期に1回、計2回の薬剤撒布が必要で、本虫の防除には撒布適期の把握が最も大切であることを強調しておいたから参照せられたい。

パラチオン剤によるイネカラバエ防除の一事例

金子 和 夫

(新潟県中頸城病害虫防除所)

イネカラバエの防除を普及する手段として、実際農家の圃場を使用し、パラチオン粉剤による第2化期防除について、その適期を検出すると共にその効果を傷穂数の発生及び減収によつて査定しようとして現地試験を行つた。その結果によると、傷穂の減少状態については7月20日撒布区が他の区に比べるとすぐれていて、分散分析の結果、傷穂数では1%水準、傷穂率でも1%水準での有意差が認められた。これを、試験地に近い北陸農業試験場の発生消長から考察すると、成虫の発生最盛期は7月14日、産卵最盛期は7月20日とみられることから、本虫の薬剤防除適期は産卵最盛期附近にあるもののように想定される。

収量については7月20日撒布区が他区に比べると5%有意水準によつて高位を示したが、7月12日及び26日撒布区は無撒布区より多少すぐれていると思われる程度で有意性はなかつた。この試験範囲から傷穂率を x として相関をもとめたところ、両者の間に、 $r = -0.7528$ の相関係数を得、 $y = 321.92 - 0.18x$ の関係直線式が算出され、また、傷穂率を x とし最高収量区である7月20日撒布区に対する各区の減収率を y として相関をもとめた結果、 $r = 0.7837$ の相関係数と、 $y = 0.05 - 3.82x$ の関係直線式を算出することができた。

有機燐製剤(粉剤)の使用及び被害茎拔取り併用による

2化期ニカメイチュウ防除について

望月正己・常楽武男

(富山県農業試験場)

ニカメイチュウに対してパラチオン剤が使用される様になつて以来、1化期ニカメイチュウの駆除は非常に簡単になつた。しかし2化期の場合はまだ不完全で

あつて、1化期ほどの防除効果を期待することは容易ではない。そのため、いきおい大量の薬剤を扱うことになり、それに比例してパラチオン剤による事故も多

